

## 第13節 追込網漁業

### 1. 沿革

#### 1) 戦前の推移

本県の追込網は、沖縄県の糸満からもたらされた。糸満の漁民の名を世に広めたのは独特な潜水漁法で、棒の先に白片をつけて脅したり、音をさせながら威嚇して、仕掛けた網に魚を追い込んでいく漁法である。この網の歴史は古く先史時代に上ると言われるが、本格的には、1884(明17)年<sup>1)</sup>の夏、糸満の玉城保太郎が水中眼鏡を考案したことで、潜水漁法の革命的な変革をもたらされた。1890(明23)年ごろに「廻高網」(アギヤー)という大型の追込網が考案された。サバニ-8~10隻と運搬船を持ち、乗組員40人前後で、漁獲対象はアカムロ(グルクン)が多く、東南アジアでは「ムロ網」として普及している。水深15m前後の透明度の高い海域が良いとされる。一回操業2.4トンの記録もあり、漁業空白地帯の大島南部の島嶼に導入が進んだ。

1907(明40)年ごろ、徳之島を皮切りに、1912(大元)年沖永良部島、1913(大2)年奄美大島古仁屋、1915(大4)年与論島等に糸満から導入<sup>2)</sup>された。第二次世界大戦の終わる1945(昭20)年までに与論島に8組、沖永良部島に7組、古仁屋に3組<sup>3)</sup>、徳之島に4組あった。組の構成は大きいものはサバニ-10隻、漁夫70人程度。大方の組はサバニ-2~5隻、漁夫平均20人であった。このことは奄美群島の南部の島が沖縄県の経済圏にあり、糸満漁業と深く関わっていることを示し、明治末期から大正初期に定住化の傾向も窺われる。乗船して漁夫として働いた者から自立する者も現れ、次第に地元漁業として変容していった。漁業は島内のスズメダイ等を主対象にする小規模なもの、島内外の広域漁場でイサキ、タカサゴなどを対象にする本格的な「アギヤー」(追込網)の規模の大きいものと大別される。

#### 2) 戦後の推移

大方は戦中に解散・休業のやむなきに至っている。戦後は本土との行政分離等の試練を経て、追込網漁業の再編成が進んだ。自前網組への交代・移行、島外出漁の大型網組の衰退で、島内自給の小規模な網組が存続した。戦後の1948、'49(昭23,24)年に与論島8組、沖永良部島3組、徳之島5組が誕生したが、以後与論の漁業者によって自前操業が出来るようになり、従来沖縄式と称していたものも本県化するようになる。日本経済の高度成長の波を浴びながら、1970年代(昭45~54)後半にほとんど衰退する。その後2~3統前後で推移したが、1983(昭58)年、許可が24統増加して、現在に至っている。これは珊瑚礁魚の利用促進のためで、専業ではないと考えられる。

1954(昭29)年、奄美大島の本土復帰に伴う基本計画調査で、母船式追込網漁業は群島内に3統あり、代表的なものは母船37ト、120馬力の2隻、クリ舟6~7隻を持って1統を形成した、従事者は船員15名、漁夫50名(大島20名、沖縄30名)の大集団漁業で、奄美大島の近海漁業としては最も大型化し、漁場は十島、黒島、竹島、大島近海から遠く長崎方面まで伸びている。漁期は周年(ただし2月休業)、盛漁期は4~9月である。漁獲高は3統で24万4千トでアカムロ、アオムロ、ブダイ、クロダイ、イサキ等を漁獲した。特にアオムロは一本釣り、延縄の餌として高値で沖縄方面に移出され、ドル獲得の役割を果たしていた。

「沖縄式追込網」の名が冠せられるのは鹿児島県では1961(昭36)年ごろまでで、以後取り扱いも「追込網」となっていることは、この漁業が本県の漁業として正式に位置づけられたことを意味する。半面、この漁業は能率的に過ぎ、乱獲の傾向が強いため、他県では禁止漁具となっている。しかし本県では1982(昭57)年まで4統前後だった許可統数が、その後20統前後に復活している。

### 3) 漁業制度との関連

1901(明34)年、漁業法によって漁業の種類が制定されたが、それに基づき、1902(明35)年に制定の県令第60号本県漁業取締規則にも、追込網に該当するものは見あたらない。1952(昭27)年、県規則9号鹿児島県漁業調整規則に沖縄式追込網として漁業許可の内容に組み込まれるまで、専用漁業権に基づいて操業すること以外は自由漁業であった。1964(昭39)年の県規則第98号の鹿児島県漁業調整規則では、第7条で敷網漁業の中に包含<sup>4)</sup>されている。大島地区においては自家消費程度の漁獲があれば、それ以上には漁獲せず漁業秩序をめぐっての紛争はなかったのであろう。大島ではすべての漁業権が単独の所有権ではなく、共同所有権であったということである。このようにして大島地区では終戦まで漁業組合が存在せず、従って専用漁業権が1件もない、特殊な状況下にあった。このような環境下であったので、追込網は南部三島に容易に進出したのであろう。

## 2. 漁業技術の発達

### 1) 追込網が起こりのころの漁具漁法

網は地先の水深、漁業者数により伸縮自在で、一定しない。1907~1942(明40~昭17)年まで、徳之島で操業したカマス一組(大城組<sup>5)</sup>)の規模は漁夫70人、サバニ-10隻、糸満を中心とする責任者と漁夫であった。追込網がいつごろから存在したかは定かでないが、先史時代から潜水の技術と共に存在したようだ。『沖縄の海人』の著者・上田不二夫氏は言う。上記の大型追込網は廻高網(まわしたかあみ。方言でアギャー)と呼ばれる。この大型追込網の出現の背景には1884(明17)年の水中眼鏡の考案と綿網の普及があった。

追込網漁法の概要<sup>6)</sup>を1929(昭4)年の沖縄県水産試験場調査をもとに説明すると、船はサバニ-8隻から10隻、運搬船1隻で構成される。乗組員は1隻に4~5人、いずれも網の大きさにより異なるが、大体10隻、40名ぐらいの規模が多いようだ。漁獲はアカム口が多く、大漁の年に年間水揚げ高15,000円、1回操業2,400kgの記録がある。漁期は周年、盛漁期は2~4月、8~10月である。漁場は沿岸5哩以内、水深10mぐらいのところ、透明度の高いところが最適としている。

#### 追込網漁業許可一覧

年次 許可数 関係漁協

西 暦	年 号	統 里	下 甌	笠 沙	山 川	屋 久 町	龍 郷	笠 利	名 瀬	大 和	宇 検	瀬 戸 内	喜 界	徳 之 島	沖 永 良 部	与 論	備 考
1950	昭25																
1953	28	4															
1954	29	3					=		2			1					
1955	30	4															
1956	31	8															
1957	32	1															
1958	33	1															
1959	34	2															
1960	35	1															
1961	36																
1962	37																
1963	38	2															
1964	39	1															

西 曆	年 号	統 里	下 甑	笠 沙	山 川	屋 久 町	龍 郷	笠 利	名 瀬	大 和	宇 検	瀬 戸 内	喜 界	徳 之 島	沖 永 良 部	与 論	備 考
1965	40	2															
1966	41	4															
1967	42	4															
1968	43	11	2	1													桜島
1969	44	5		2					1		1	1					
1970	45	4		2								1					川内
1971	46	1										1					
1972	47	1															
1973	48	4	2									2					
1974	49	4				3						1					
1975	50	1										1					
1976	51	4	1	1								1	1				
1977	52	1	1														
1978	53	2										1					
1979	54	3							2			1					
1980	55	3	1			2											
1981	56	4	1			2									1		
1982	57	4	1			2									1		
1983	58	24	1			2	3	2	1	2		4		2	4	3	
1984	59	27					4	2	1			4	3	6	4	3	
1985	60	28	1				4	2	1		4	3	2	4	4	3	
1986	61	25	1				5	4	1			4		6	4	3	
1987	62	25	1				5	4	4	1		3		2	5		
1988	63	21	1			1	5	4		1		3		2	4		
1989	平 1	21	1			1	5	4		1		3		2	4		
1990	2	21	1				5	4		1		4		1	4		
1991	3	20	1				5	4		1		4		1	4		
1992	4	16	1				5	3		1		4	1	1			
1993	5	18	1				5	4		1		5	1	1			
1994	6	18	1				5	4		1		5	1	1			
1995	7	19															
1996	8	22	1				3	6		1	1	6	1	2	1		

注：1961年「沖縄式」の名称消滅

県水産要覧等より作成

漁法は、先ず海底に網を敷設する 遠方より円陣をつくって網口に魚を追い込む。ヤマまたはスカルシーと呼ぶ立ておどし縄で海底を叩きながら、岩礁間の魚を残らず狩り立て、袋網ちかくに追い込み、垣網を袋網の方に巻き込むようにして逃げるのを防ぐ 魚を完全に袋網の中に追い込み終えれば、漁夫は潜水して袋網の前敷を揚げ、魚を包んで漁獲する。

「この漁法は珊瑚礁の魚を獲るためには唯一の漁法である」と加計呂麻島での追込網の調査で感じた。

## 2) 漁具の構造

### (1) 廻高網の漁具

大型の追込網では袋網の長さ50~54m、へた側袖網高さ12.6m、長さ270m、沖側袖網高さ16.2m、

長さ 360mの古い記録があるが、これには多くの漁夫を要する半面、漁獲も多いので、好漁場を求めて移動し、また漁獲物を運搬するために機動性が必要となる。

(2) 追込網の構成

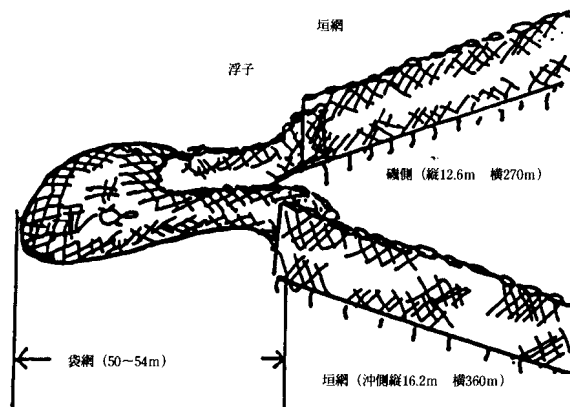


図1. 追込網の構成

(3) 操業

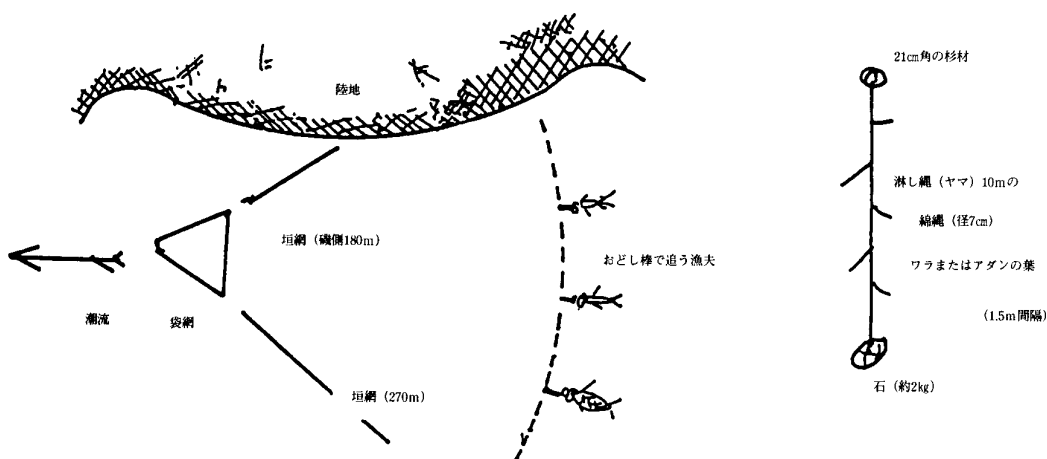


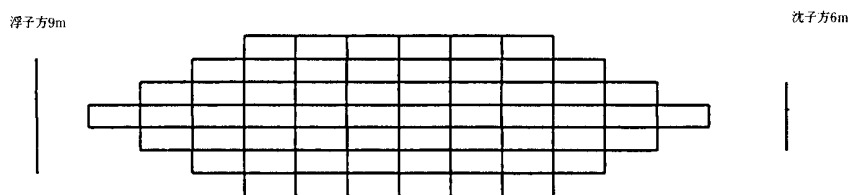
図2. 追込網操業図

3) 最近の追込網漁業

(1) 漁具の構造 [瀬戸内漁協, 田原丸の例]

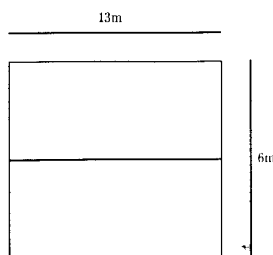
瀬戸内漁協の追込網は導入時からの古い伝統を引き継ぎ、第二次世界大戦中も休漁せず継続した。最近では漁具も小規模化し、アクアラングの導入で潜水技術も一段と飛躍した。漁具もクレモナ網の採用で取り扱いが便利となり、海中作業が容易になった。操業では家庭で使用済みのビニール袋を活用して、海中でボンベから空気を注入し、その浮力で浮上させるように工夫している。この漁具についてつぎに説明する。

網地の配置  
袋網



網地：クレモナ12～15本、15～18節、20目掛を3mに切り、縫い合わせる。  
仕立上りは浮子方9m、沈子方6m。

## 袖 網



網地：クレモナ8および9本，10節，13m（200目）の網地2枚を縫い合わせる。  
8～10把使用。上網：8本。下網9本の太さ。

図3. 網地配置図

### 資材構成材料表

#### ア．網地材料表

名 称	材 質	太 さ	目 合	掛 け 目	長 さ	総使用数	備 考
袋網	クレモナ	12～15本	15節	200目	3m切	180m	3m×60反
袖網上網	クレモナ	9本	10節	200目	13m	104m～140m	13m：1把分
下網	クレモナ	8本	10節	200目	13m	104m～130m	8～10把使用

#### イ．網類材料表

名 称	部 位	材 質	規 格	使 用 数	備 考
袋 網	浮 子 網	ポリエチレン	8 mm	11～12m	
	沈 子 網	クレモナ	15mm	7～8 m	
袖 網	浮 子 網	ポリエチレン	6～8 mm	15m	1把分
	沈 子 網	クレモナ	5～6 mm	15m	
目通し糸		スパン	18, 21, 24本		

#### ウ．浮子，沈子類材料表

名 称	部 位	材 料	規 格	使 用 数	備 考	
袋 網	浮 子	合 成	AC 8号(10cm)	55個		
	沈 子	鉛	20～30 g	10個		
袖 網	浮 子	合 成	AC 8号	60個	20～30cm間隔に1個使用	1把分
	沈 子	鉛	20～30 g	100～120個	10cm間隔に1個	

### 漁 法

漁船は高速船を使用し，早朝漁場に到着，夕刻の市場に間に合うように帰港する。最近の追込網は，

ア．網は簡単な構造で，合成繊維で軽く，袋網，へた袖網，沖袖網に3分割して取扱が便利にできている。漁場では船頭は魚群を探索し，発見すれば先ず袋網に潮を受けて膨らませて張り，次いで袋網の両側から袖網を「八」の形に広げてセットする。漁夫は魚群のいる場所を円陣を組んで潮下の受網の方に威嚇用具（脅し棒）で追い込むが，操業には網の敷設と潜水の2法をうまく組み合わせ，浅海の珊瑚礁漁場を魚群を見ながら網をセットし，魚群を追い込む。機動的で高能率であり，漁場を選択しながら1日数回操業できる。この漁法自体は伝統を保っているが，魚種，乗組員数により漁具の規模は多様化している。

イ．アクアラングの潜水漁法は、6～7人の小人数の漁業者でも空気ボンベや、高圧空気充填機を積んだ漁船を使用すれば漁業が容易になったことから、漁業許可が多くなったと思われる。

ウ．最近では袋網を揚げるときビニールの袋を魚の入った網に取り付け、ボンベの空気を送り膨らませて、浮力で水面に浮上させるようにしている。

写真 ボンベの空気でビニール袋を膨らませ浮上させる。



操業写真

#### 漁期と漁場

漁期は周年であるが、魚種により漁期は異なる。漁場は加計呂麻島、諸島、奄美本島の比較的波の静穏な場所を選んで操業する。

#### 漁獲物

瀬戸内漁協追込網漁業の魚種別漁獲高は次の通りである。タカサゴ、スズメダイが多く、全体の80%を占める。タカサゴは沖縄では「グルクン」と呼ばれ、体長30cm、珊瑚礁外縁の水深30m前後に生息する。産卵期は4～5月である。東南アジアに広く分布しているが、沖縄ではタカサゴをムコと言うので、沖縄式追込網でタカサゴを漁獲する事を「ムコ網」と称し、東南アジアでもこの言葉で通じる。

1997年度 瀬戸内漁協 追込網漁業魚種別漁獲高 単位:ト,円

魚種	漁獲数量 (kg)	漁獲金額 (円)	魚種別構成 %
タカサゴ	43,449.4	29,480,970	対漁獲量:61
スズメダイ	13,544.6	9,697,226	19
ホタテ	28.7	16,644	
ハタ類	705	219,523	
ミズイカ	3.1	7,130	
コウイカ	114.5	127,410	
タコ	47.1	89,910	
その他の魚類	14,114.7	11,425,239	20
合計	71,372.6	51,064,058	100

#### 瀬戸内漁協の漁獲の経年推移 (漁協業務報告書より)

年次	漁獲量 (ト)	漁獲金額 (千円)
1995	74.2	53,867
1996	69.5	48,649
1997	95.1	69,419

4) 各地区の追込網の概要

(1) 沖永良部島漁協の例：関根博和氏の発表資料による。

[漁具] 沖縄式追込網漁業

[操業人員] 6人 (ボンベ5人, 船員1人)

[漁船] 船内外機船 2隻 (本船2.5ト, 網船1.0ト)

[潜水器具] ボンベ26本, レギュレーター, ハーネス8組 (2組は予備)

[網具] 袋網は高さ約15m, 奥行き20m規模のものを常時2組用意する。魚種によって使い分け。

袖網 長さ150m, 高さ150mのもの, 両側に使用。

おどし棒 竹またはビニールパイプを1.2mの長さに切り, これに10本の色つきニール片を付け, 魚を脅す。10本を用意する。

[操業方法] あらかじめ魚群を探知し, 本船から袋網, 袖網を投入する。袋網前方300~500mから脅し棒を持ったメンバー5名が潮下方向に追い込む。追い込みの技術は魚種, 漁場によって変わる。

[対象種] タカサゴ, ブダイ, ヨスジダイ, ヒメジ, スズメダイ等

[漁獲高] 沖永良部島漁協の生産量

漁業種	昭59年	60	61
飛魚ロープ曳網	4.3ト, 2,884千円	15.8ト, 9,852千円	18ト, 6,882千円
追込網	22.9ト, 15,634千円	27ト, 17,716千円	30ト, 21,628千円

[販売先] 名瀬, 鹿児島, 那覇

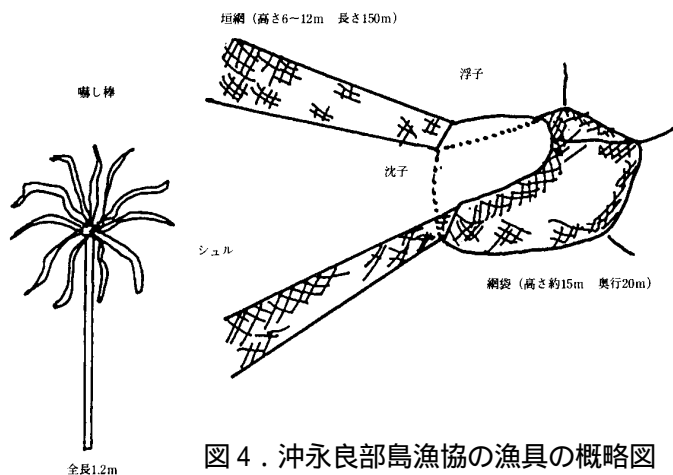


図4. 沖永良部島漁協の漁具の概略図

(2) 笠利漁協の例：1992(平4)年普及員研修報告より

追込網 操業統数4統。うち周年操業は1隻, 残り3統は3~6月のスズメダイ, タカサゴの漁期のみ操業。

[漁船] 本船6.5ト, 45馬力

船外機船 0.6ト30馬力, 0.4ト30馬力

[操業人員] 10~12人, 最低7名

[ 漁期と漁獲物 ] 盛漁期 3~6月

魚 種	漁 期
スズメダイ	12~4月
アカウルメ (タカサゴ)	4~6月
ブダイ, 雑魚	7~11月

[ 販 売 先 ] 地元漁協。多い時は名瀬漁協に運ぶ。

[ 漁 場 ] 10~30mの珊瑚礁外縁。スズメダイ 10~25m, アカウルメ 20~25m, ブダイ, 雑魚 10~20mの水深。

[ 漁獲物の構成と漁獲量 ]

漁獲物の構成 (11月)

アカウルメ (かぶくや)	53
アカウルメ (ぐるくん)	29
スジアラ (はーじん)	
コウゲル (にぎだい)	2
マススー, ほか雑魚	15

平成3年度の1統当たり漁獲量 5.6ト, 5,300万円 (周年操業), 季節操業 2.3ト, 2,400万円。

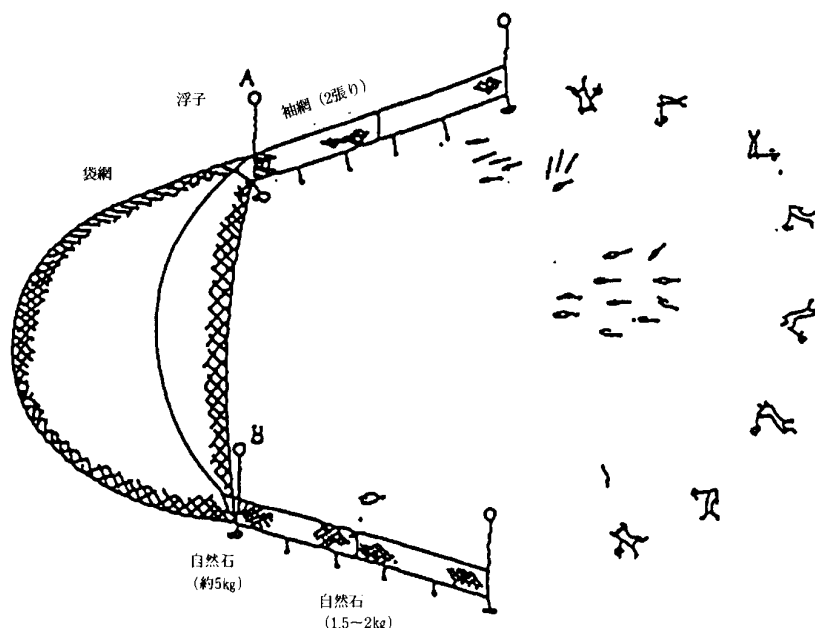


図5. 笠利漁協の漁具の概略図

### 3. 問題点と今後の課題

#### 1) 追込網の利点と問題点

珊瑚礁を漁場に利用しているため今後も有望な漁業である。

潜水と網漁業の組み合わせで, 魚群を認めながら網に追い込む。确实, 能率的な漁業である。

狭い珊瑚礁区域を漁場にして, 確実に漁獲出来る能率的な漁具である。半面乱獲の恐れがある。

潜水技術を伴い, 若い労働力を必要とする。

収益性の低下などで漁場の合理的利用, 資源維持や労働力の問題が起きている。



## 2) 今後の課題

この漁業は常に資源問題がつきまとう。しかし珊瑚礁漁場は操業が困難で、この技術に依存せざるを得ないのが実情である。最近県外では禁止する県が多いが、本県は小笠原群島と同じように珊瑚礁が多い特殊な条件下にある。他の漁業との組み合わせなどを考慮しながら、漁期を短縮するなど資源保護策の検討を行い、大島漁業の発展を期すべきだ。

## 4. 参考文献

- 1) 上田不二夫(1991): 追込網, 沖縄の海人, 沖縄タイムス社, 212~213.
- 2) 市川英雄(1990): 戦前・戦後の奄美南部三島における追込網の変遷, 鹿児島大学水産学部紀要. 39, 207.
- 3) 瀬戸内漁協沿革誌: 追込網の由来, 40~43.
- 4) 鹿児島県水産史(1968): 特別漁業権, 253.
- 5) 上記2の市川に同じ
- 6) 上記1の上田の糸満の漁具・漁法, 211~215.

(福元 覚)